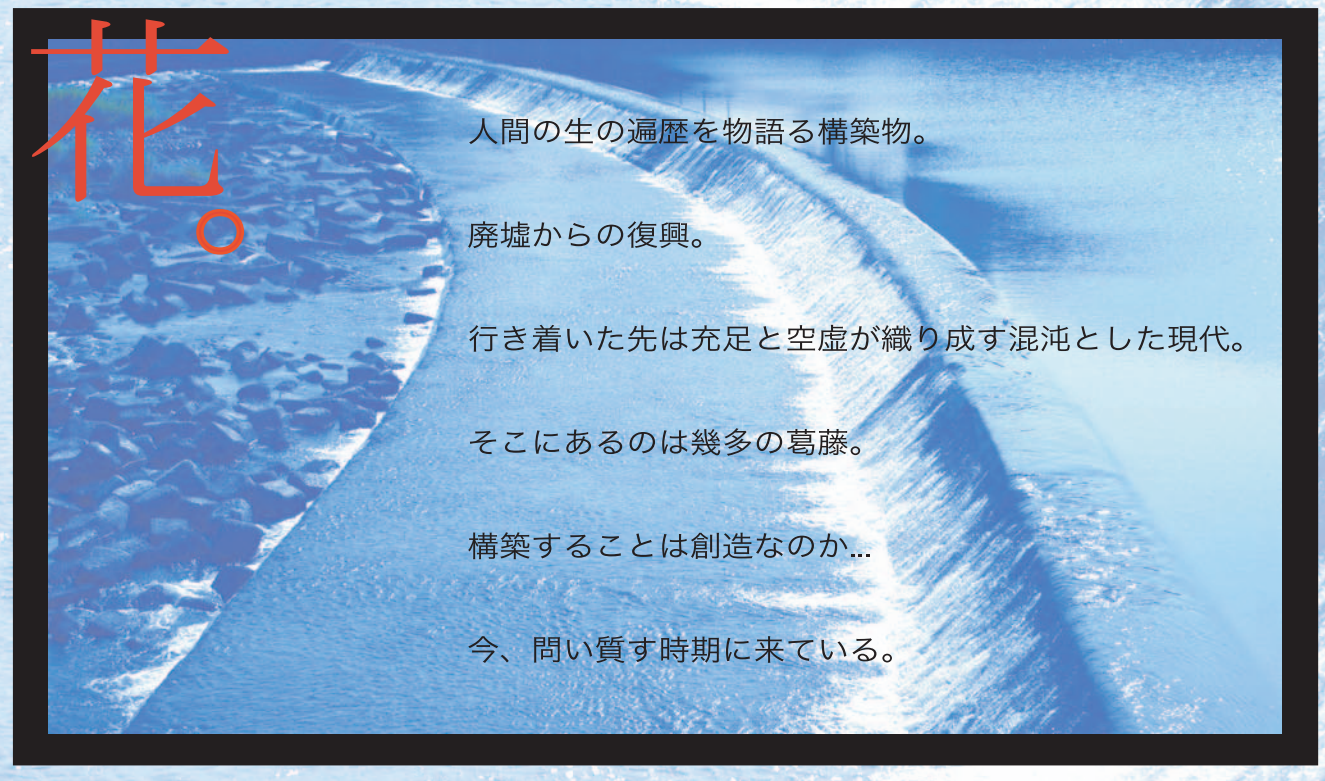
景観開花。

～土木デザインの再構築～



2006年度　報告書

企画の趣旨

戦後の高度経済成長期に早急な社会基盤の整備が求められ、
土木技術者は、場所性を無視した画一的な土木構造物を
量産せざるを得なかった。現在、こうした高度成長期の
呪縛から解き放たれた土木デザインも増えつつある。
それでも、社会全体から見ればそれはほんの一握りである。
高度成長期の考え方に呪縛されたまま、興味がないというより
むしろ、土木デザインに触れる機会がない技術者がほとんどだろう。
市民からも環境意識の向上、生活のゆとりや豊かさといった
新たなニーズが生まれ、土木デザインも重要な要素として
求められるようになってきた。
そこで、本「設計競技」ならびに「パネルディスカッション」を
行うことで土木デザインに関心のある若年の力を試す場を提供する
と同時に、多くの人々に土木デザインの可能性を示すことを趣旨とする。

もくじ

設計競技概要	P.1
審査委員・パネリスト紹介	P.2
審査結果	P.3
入賞者プレゼン	P.4~P.9
パネルディスカッション	P.10~P.14
応募作品	P.15~P.20
アンケート集計結果	P.21
メイキングPHOTO	P.22
編集後記	P.23~P.24

景観開花

設計競技

テーマ「川」

概要

■課題

私たちは、川の存在なくしては日本の都市の発達を語ることはできない。本来、人と川との関係は密接であるはずだ。

しかし、治水・利水を優先した河川の整備や画一的な土木施設・都市施設の建設によって、人と川との関係は希薄になってしまった。

これからの「川と人さらに都市との関係」はどうあるべきか。新時代にふさわしい河川を創りだすための空間構成や構造物を提案してほしい。

■設計条件

1．デザインの対象となる空間・構造物は任意で、種類、規模、提案する範囲はすべて自由とするが、現実の場所を各自選定し、周辺の風景への収まりを十分考慮した上で提案すること。

2．既存の河川空間における「川と人とさらに都市との関係」には見られない独自のアイディアを盛り込むこと。

■日程

エントリー受付開始（web）	平成18年　7月24日（月）
エントリー受付締め切り	平成18年　9月24日（日）
提出締め切り（必着）	平成18年10年11日（水）
一次審査会	平成18年10月13日（金）
公開最終審査会	平成18年11年　3日（金）

実施結果

■応募状況

エントリー数　96グループ

応募作品数　　36作品

■審査方法

一次審査：審査会場に作品パネル及び模型を展示。全作品から各審査委員が入賞作品５点を選定。
また、ヨシモトポール株式会社，株式会社東京建設コンサルタントにより特別賞を選定。

最終審査：一次審査通過作品から審査委員の合議により、最優秀賞１点、優秀賞１点、佳作３点を決定。

設計競技審査委員、パネリスト紹介

■審査委員・パネリスト

篠原　修　Osamu Shinohara　<審査委員長>

土木設計家

略歴
1945 栃木県生まれ、神奈川県育ち
1971 東京大学大学院土木工学専攻修士課程修了
1971 (株)アーバンインダストリー
1989 東京大学助教授(工学部土木工学科)
1991 同教授
2005 GSデザイン会議発足
2006 退官
現　政策研究大学院大学教授

主な作品
「辰巳新橋」
「JR東日本東京駅高架橋」
「勝山橋」
「津和野川護岸・広場」
「朧大橋」

伊藤　登　Noboru Itoh

風景計画家

略歴
1959 北海道生まれ
1984 東京工業大学大学院修士課程修了
1984 清水建設、ポリテクニックコンサルタンツ
1989 プランニングネットワーク設立
現　同代表

主な作品
「阿武隈川渡利水辺の楽学」
「阿武隈川御倉地区景観整備」
「阿武隈川稚児舞台地区景観整備」

小野寺　康 Yasushi Onodera

都市設計家

略歴
1962 北海道生まれ
1987 東京工業大学大学院修士課程修了
1985 アプル総合計画事務所
1993 小野寺康都市設計事務所
現　小野寺康都市設計事務所代表

主な作品
「門司港レトロ地区環境整備」
「桑名住吉入江」
「浦安境川」
「野蒜水門修景」

本江　正茂　Masashige Motoe

建築家

略歴
1966 富山県生まれ
1993 東京大学大学院博士課程中退
2001 宮城大学事業構想学部デザイン情報学科専任講師
2006 東北大学大学院都市・建築学専攻助教授

主な作品
「時空間ポエマー」
「MEGAHOUSE」
著書
『Office Urbanism』　新建築、共著
『バーチャル・アーキテクチャー』
　東京大学総合研究博物館、共著

■特別パネリスト

阿部　仁史　Hitoshi Abe

建築家

略歴
1962 宮城県生まれ
1985 東北大学工学部建築学科卒業
1989 SCI−Arc（南カリフォルニア建築大学）
　M-Arc3修士課程修了
1992 阿部仁史アトリエ開設
1993 東北大学建築学専攻修士課程後期終了
現在 東北大学大学院都市・建築学専攻教授

主な作品
「宮城スタジアム、」
「関井レディースクリニック」
「苓北町民ホール」
「菅野美術館」

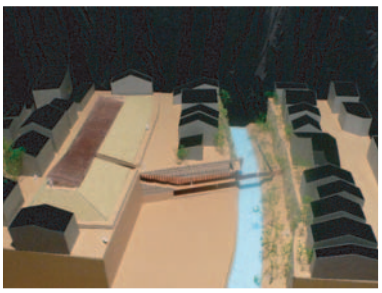
五十嵐　太郎　Taro Igarashi

建築評論家

略歴
1967 パリ生まれ
1992 東京大学大学院修士課程修了
2000 博士号取得(工学)
2004 中部大学助教授
2005 東北大学大学院都市・建築学専攻助教授

主な著書
『新宗教と巨大建築』　講談社現代新書
『終わりの建築/始まりの建築』　INAX出版
『美しい都市・醜い都市』　中公新書ラクレ
『戦争と建築』　晶文社

審査結果



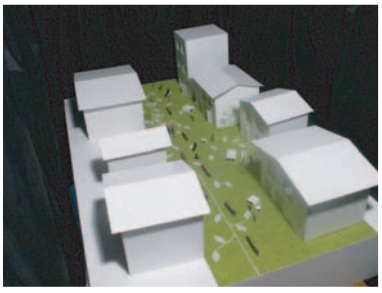
最優秀賞

■作品名　ODOI-ONSEN project

■作者名　京都工芸繊維大学大学院　森岡　俊介

●対象敷地
御土居（京都）

○講評
オドイに目を付け、そこに温泉を持ってきたのはユニークで大変おもしろい。
文化財的なものと絡んで楽しい空間になっている。



優秀賞

■作品名　脱・浸水区域

■作者名　早稲田大学院理工学研究科　西田　佳祐
早稲田大学院理工学研究科　坂井　遼
早稲田大学院理工学研究科　白井　健太郎
早稲田大学院理工学研究科　伊藤　豪基

●対象敷地
妙正寺川周辺（東京）

○講評
雨水の一次貯留を路地コミュニティの再生、形成に利用するというアイデアが面白い。日射などの現実を踏まえていると、もっとリアルな空間になった。

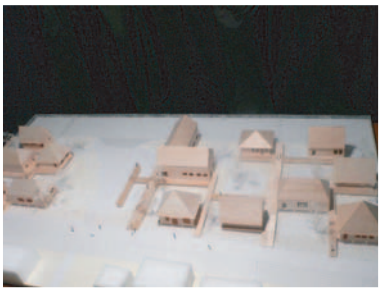
佳作

■作品名　寄り切り

■作者名　日本大学　小津野　勝也
日本大学　下田　明広
日本大学　加藤　雪子

●対象敷地
両国（東京）

○講評
現実的で、完成度も高い。
完全に寄り切って、両国らしさを引き出せたらもっと良かった。



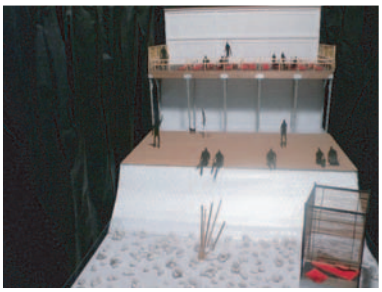
佳作

■作品名　陸ときどき川

■作者名　日本大学理工学部
社会交通工学科デザイン研究室　土川　泰明
日本大学理工学部
社会交通工学科デザイン研究室　大島　淳之

●対象敷地
バンコク（タイ）

○講評
水に浸かったときの使われ方を示して、濡れて住むことを良しとするロジックを明確にして欲しかった。



佳作

■作品名　灯籠流し

■作者名　東北大学　小池　宏明
東北大学　鈴木　茜
東北大学　長坂　光

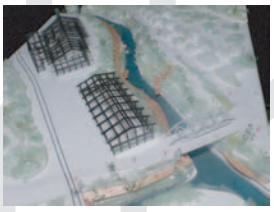
●対象敷地
鴨川（京都）

○講評
川のデザインとしては極めて非現実的だが、箱のデザインは美しく、風流だと思う。実際の空間に対する具体性がもっとあると良かった。

ヨシモトポール賞

■作品名　寄り切り

以下省略

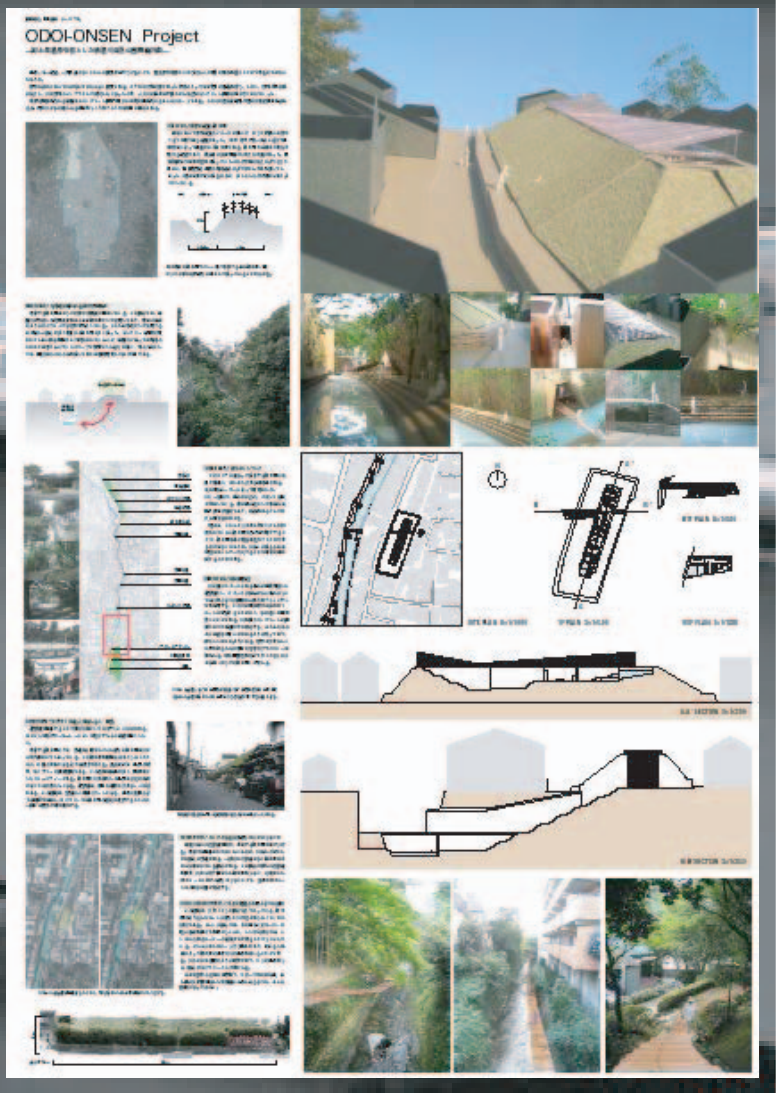


東京建設コンサルタント賞

■作品名　SCENE CITY

■作者名　日本大学生産工学部　柏倉　健司
日本大学生産工学部　河本　永樹
日本大学生産工学部　松本　究

ODOI-onsen



小野寺：大変おもしろいと思うのですが、オドイを選んだのはあなた自身が京都で勉強して、見ておもしろいと思ったからですか？きっかけはあったのですか？

受賞者：大学の課題で調べることになり、オドイがあるぞと見つけました。京都に住んでいる人にも知られてなくて、行ってみるととんでもないものがあるぞと。今回テーマが川ということで、うまくまとめられるのではないかと思いました

小野寺：オドイは結構失われてしまったそうですが、オドイ沿いの堀はまだあるのですか？

受賞者：北西部は川がそのまま堀になっていたので残っています。他の部分は埋められているとか。鴨川も周りが完全にフラットになってしまいオドイが見えない。川とオドイがぎりぎり残っているのがこの部分でした。

本江　：巨大な土の山、これは誰の持ち物？

受賞者：民間の所有でした。実際 2000 年くらいまではこの倍の長さがありまして 2001 年あたりからこの建売住宅が始まり、オドイは文化財としては保存しにくいもので、どんどん減っています。今、なんとかしたいと思う。

篠原　：これに目をつけてるのはあなただけなの？

受賞者：名前は知っていてもどこにあんの？とか質問されるのがほとんどで、意外と知られていません。

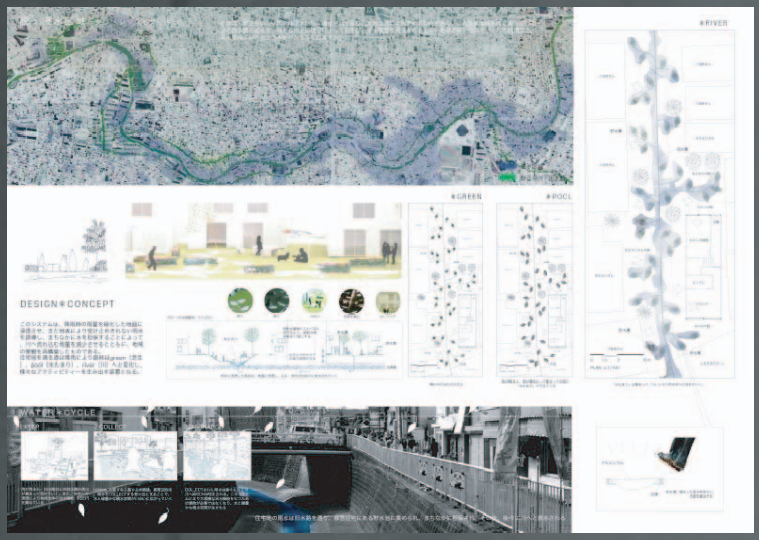
本江　：オドイそのものの姿でもいいのでは。オドイの見え方についてはどう思うの？

受賞者：現在の状態だとオドイに入れないのでまずい。できる限り外からは見えない状態にした。斜め方向にお風呂が見えたりしないようにデザインしました。

小野寺：ここに温泉、お風呂を持ってきたのはユニークでおもしろい、ツボにはまっている。逆にお風呂以外のオプションはないの？プランニングの段階で他のものは？

受賞者：具体的には、ワインセラー、お茶、昔オドイというのはお茶畑や桑畑として利用されていてそういうものも考えた。オドイ単体としてしまうよりはこういった周りのものと一緒に塀を作ればと思いました。

小野寺：水に関係したものがいいと思ったのですか？
受賞者：そういう直感的なものもあったのですが、ほんとに今は見えない状況でさびしいので、見えないとこに行って見つけた自分の空間にしたかった。人かワインセラーかと言ったら人の方がよかった。
篠原　：模型見ると神谷川から横に穴を掘っているが、雨が降ったとき神谷川の水深が上昇して中に入ってくるが、それはどうしますか？
受賞者：神谷川というの　山から出たばかりの部分で、住宅から一気に流れ込むタイプの川ではないので高くなってきてもせいぜい１Ｍくらいです。それ以上あがることはないので、ギリギリ連続するけど水が入ってこないところにしました。
篠原　：ここまでは浸水してもいいと考えているわけか？
受賞者：川辺の床レベルまでです。ここは高いが水害のための段差ではなくゆるやかな河岸段丘を無理矢理くくってやった
篠原　：神谷川が洪水でもあまり水位が上がらないって本当？
受賞者：いや、地元の人にどのくらい水が上昇するか聞きまして、稀にみる洪水で水位が上がらないかかと言われると微妙です。
篠原　：君は今日始めてここに来るわけで人の模型見るのもはじめてだと思いますが自分の模型見てどう思いますか？
受賞者：都市的なスケールをヒューマンスケールにいかに押し込むかがポイントでして、全体が部分を表し、部分が全体を現した感じのものを意識しました。
篠原　：いまの説明を聞いてみたら綺麗だなって思うかもしれないけど、最初にこれを見たときは昔の炭鉱の炭住かと思った。住宅が暗い感じで楽しい感じはしなかった。
受賞者：新しい空間にがくっと入ってる感じを表した。いろいろな素材をためした結果こうなりました。
本江　：えぐった内側はどうやって？
受賞者：土にしたいけど無理そうなので粗い感じのコンクリートなどを使用したい



脱・浸水区域

伊藤　：雨水の一次貯留を路地コミュニティの再生、形成につなげようという提案ですね。そういう活用できそうな旧水路の路地がどれぐらいあるんでしょう？

受賞者：ほぼすべての地域に旧水路が存在します。現在は路地化していて水はないですが、そういった路地を利用したいと思います。

小野寺：keep collect discharge ですか。ソフト能力はあると思うんですが、これ出会いの場って言ってましたよね。でも逆にスケールが小さいと思うんですよ。これを都市空間でやると、奥は日も入ってこないし、むしろ非衛生的な居住空間になると思うんですね。密集地でやるなら、オープンスペースを広げて、日も入り、流域全体を変えていかないと。そのへんどうですか？

受賞者：実際ヨーロッパで住宅地の中に水を通す事例を見たのですが、非常に気持ちいい空間になっていて。日本の路地はたしかに狭いですが、そのヒューマンスケールを楽しめる空間になればと。オランダのエンスカデーという事例があるんですが、そこを参考にしてやってます。

本江　：日本の路地だと、雨が上がっても日も当たらず、そんなさわやかにはならないと思います。日本でやるとコケが生えてモスグリーンな感じになっちゃう。でもそれが現実で、それをふまえてコミュニティの場を形成すると、どのようなデザインがあるかっていうリアルな問題をたてていれば、リアルな空間になるかなぁと思いました。提案全体が非常に地道にできているし、根幹的なアイデアも面白いと思うんですが、最後のアウトプット、葉っぱになっていたり、ライトアップしたりするところで、急に絵に描いたようになっていて、悔しいなという感じはしました。

篠原　：僕は面白いなと思って聞いてました。路地って言うけど、行き止まりってのが路地の定義なんだよ。これは裏通り、あるいは裏道。あとこの旧水路が幹だとすると、枝も出したりしてみると、もっと面白かったんじゃないかと思ったんだけど。旧水路沿いだけなんだよね。

小野寺：最後のほうに葉っぱの構造図みたいなものが見えたんですけど。

受賞者：これは貯水槽の部分に、ライトを仕掛けて、水を照らそうと思いまして。水を照らすことで緑空間をさらに演出します。

寄り切り

寄り切り

小野寺：駅前をオープンスペースにし、水が見えるようにした。でも、車とかタクシーは離れてしまいますよね。

受賞者：たしかに交通の便は悪くなりますが、歩行者優先のスペースを作りたかった。

小野寺：私たちが聞きたかったのは、この提案がほんとに寄り切れているのかってことなんですよ。寄り切って勝つというのは、この風景がベストなのか、さらに奥があるのか聞きたかった。

受賞者：東京を歩いて感じることは、川の存在は知っているけれど、どこにあるのか、近づけなかったりとか。それらに対し、この提案で堤防を内側に入れることで、街を歩いていて川との接点ができればと思った。もし、堤防を土俵に例えたら、外側に立ったことで寄り切っていると言えると思います。

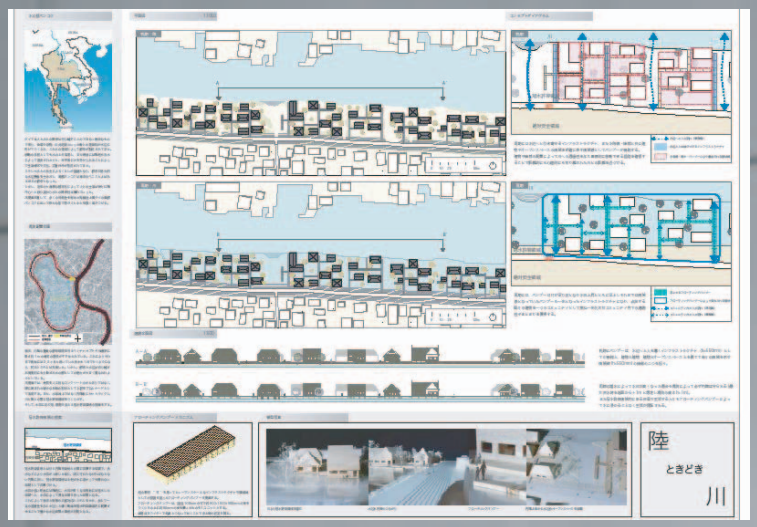
本江　：あの国技館との間に道路があって、結局は寄りきれていない。完成度は高いけど。それと、普段と相撲が開催される時では、お祭りの感じが違うでしょう。力士が船でやってきてゲートに上陸するだとか、新しい横綱が何かするとか、ここだから起こることがあれば、両国でやってもいいかって思うけど、これはどこでもできる。両国らしさをもっと引き出したかった。

篠原　：でも、わりと現実的で手堅い。学生にしてはきちんとやってるなって感じでした。

伊藤　：堤防を切るなら、ゲートがあって水を締め切る施設があれば、施設側がグランドレベルになるが、なにもないと当然水が入ってくるけどその時はどうするのですか？

篠原　：防水としてはゲートで締めるから平気でしょう。二つ橋を架けたでしょ？ただ、そこにアイデアがない。人だけがわたるこの橋を、渡っていて楽しいなぁって思える橋だとよかったなぁ。

受賞者：時間がなかった。ランドマークになる橋を考えたけどそこまでいたらなかった。



陸ときどき川

小野寺：冠水許容領域では建物があまり動いていないが、これは作り直すの？

受賞者：ここには鉄道の廃線があって、今も川岸に 1 メートルの堤防がある。既存のハウスを使うと浸水してしまいますので、新しく高床の家を建てて対応させる。

小野寺：住宅そのものが浮くわけではない？ただの水上コテージじゃんという意見に反論してほしいんだよね。

受賞者：たしかに建物だけを見たら伝統を用いたオリジナリティのないものですが、ここでの提案の提案は建物ではなく、その周辺にあるインフラです。かつてフローティングハウスに使われていた竹を、人をのせるためのインフラとして提案した。

本江　：バンコクの人が濡れても大丈夫だと言ってもやはり辛抱して暮らしています。“あなたの家は濡れてもかまいません“では困る。濡れてもいいということが社会的にどのように成立するのか？どういうロジックでそこに住みたいと思うのか？

受賞者：現状では洪水時には足を水につけて生活するようになりますし、この提案では水をかわすことができ、それぞれの領域も明確にあります。

本江　：濡れるのがよくて住むっていうロジックは？

受賞者：敷地は水に濡れるが、生活者は水には濡れない

篠原　：模型だと川から家二軒分くらいをデザインしているが、その領域はどう決めるの？

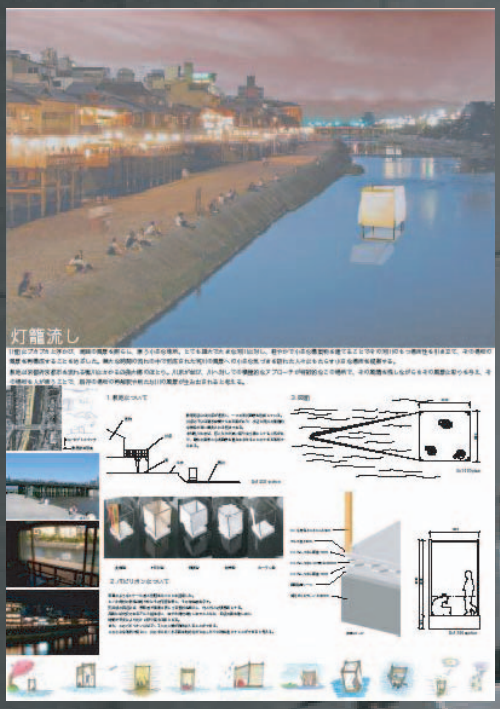
受賞者：川から堤防が陸の方に入ってくるというのを目指しまして。三軒くらいでひとつのグループ、日本で言う番地が入る程度のところを考えました。

篠原　：車はどうするのか？あと、冠水してないときは庭みたいになるオープンスペースは年に何回か浸水しちゃうけど、普通のオープンスペースと何が違うの？

受賞者：車は考えていなかった。水上交通が発達して、この先に水上バス乗り場がある。ここから公共交通の鉄道などにアクセスできる。乾季雨季の違いの魅力は使われ方の違い。乾季のときはＢＢＱしたり、インフラのテーブル、ベンチだったり。

篠原　：乾季のときはそうやって使えるだろうけど、水に浸かったり、ちょっと浸かったりしたときの使われ方があればおもしろいなと思って聞きました。

灯籠流し



小野寺：ご飯食べてますよね？そういったサービスはどうやるの？

受賞者：基本的にそういったサービスの主体はありません。自由に使ってもらう場所を設定しています。ご飯を食べるのであれば、各自もってきて食べる形になります。

小野寺：だって水上にあるんだよ。どーやってご飯をもってくるの？

受賞者：水上へのアクセスは舟渡しを考えています。機材を貸し出すシステムは用意したいのですが、大きな主体が運営するのではなく、個人で使えるようにしたい。

小野寺：使う人はどーやってご飯を運ぶの？もうちょっとつっこめるところがあると、バカバカしさに情がついておもしろいかなって思うんですけど。そこがあると、リアリティがあっておもしろいアイデアになるし、ないとファンタジーになっちゃう。実際の空間に対する具体的なアイデアってことからすると、もうひとつ、社会的な取り込みがあるかなって思いました。

本江　：つまり屋形船なんですね。こういうことをするための仕組みはいろいろありますが、これが新しい水上での過ごし方を提示しているとすれば、どうゆう所ですか？

受賞者：ここには橋、川沿いに建物、川床、土手があります。家具っていうスケールのデザインと、川床っていう建築的なスケール、土木的な土手とか橋、そういう連続性が生まれるといいなということで、ポツッと置けるスケールにしました。

本江　：お客さんの体験の質はどこが違う？

受賞者：船より水面が近く、違った気づきがあると思います。流速はそんなになく、川も深くないので転覆や揺れて良さがなくなることはないと考えています。

小野寺：佐渡にたらい舟ってありますね。あれは乗り込むときが一番むずかしい。乗り込む瞬間にひっくり返るんですね。ご飯運んでる人が、乗ろうと思った瞬間にこける懸念が非常にあるんですが。

受賞者：こけたらこけたでいいんじゃないかと。浅いので溺れる危険性もありません。逆にそういう体験が川と身体的に触れ、川を身近なものとして扱うきっかけにもなると思うので、笑ってすませてもらえると。

伊藤　：もう少し低い方があなたたちの言う家具的スケールに合うのかな。鴨川　見てる人にとって、これが常時目の前にあってはちょっと不愉快だなってならないか心配。あと平常時は穏やかな川なんですけど、それなりに勾配が急だから水の力も強い。その辺をもうちょっと考えるともっとよくなるかな。

篠原　：これは川のデザインとしては極めて非現実的で普通なら　次予選で落ちるだろうと。でも残したのは、その箱がきれいだとか、風流だと思ったんですよ。でもその箱の特色についてはあまり説明がなかったんだけど。

受賞者：素材に関してはこだわりました。太陽光や周囲の風景を水面とともに照らし出す素材として、床にはアルミを選択しました。葦や茅は日本人の生活に近い素材を用いるべきだと考えたので、実際に模型で作って話しました。地域の特色、文化、歴史、そうゆうものを受け止められるものを作りたくて、素材は決めました。

パネルディスカッション

設計競技の審査委員4名と特別パネリスト2名によるパネルディスカッション。
地元仙台の広瀬川や未来の都市と河川の関係について熱い議論が交わされました。

■パネリスト

・審査委員　篠原 修（司会）
伊藤 登
小野寺 康
本江 正茂

・特別パネリスト　阿部 仁史
五十嵐 太郎

（敬称略）

広瀬川について

篠原氏「広瀬川との親密度、川との関わりなどがばらばらで、まぁある意味じゃ好対照のパネリストが揃いまし た。みなさん広瀬川についてどう思われますか？」

小野寺氏「広瀬川は見たことはありますし、情報としては知っています。しかし仙台の人たちが思っているものと、僕の思っている広瀬川はちょっとニュアンスが違うかもしれません。僕が広瀬川を見てすぐに思い出すのはニューヨークのセントラルパークなんです。都会の中に圧倒的な緑がまるで無関係であるかのような自然が挿入されてる点、コントラストが強いという点で思い出されるんですね。ただ人工的なセントラルパークと違って広瀬川は本物の自然です。そこが広瀬川の整備ではポイントになってくると思います。つまり、いかに今の都市と自然を共存して使っていけるかということです。そういったアプローチができれば、広瀬川はこれからも貴重な緑として、あるいは都市とのつながりのあるものとして存在していけると思います。」

篠原氏「伊藤さんは阿武隈で、あたかも昔からそこにあったような風景を作るようなデザインを心がけてやられています。でも広瀬川はまわりとの地形との関係が違いますか、そのあたりをどう考えますかね」

伊藤氏「学生の和田さんが説明されていたのを聞いて、あぁそうなんだって思ったことがありました。みなさんこの範囲での活動を調べていましたけ ど、広瀬川は割りと狭い範囲で認識されているんだって思ったのが印象でした。中心市街地の端の部分として認知されていますね。もう少し河口に行くと、これはこれでまた違う広瀬川の表情を持っているわけです。つまり仙台市の一部としての広瀬川を見るだけではなくて、もう少し広く見てあげないと広瀬川の本当の姿はわかってこないのかなって気がします。で、その上でこの場所なりの在り方というのをみんなで考えていく。またそのための川づくりなり、街づくりをしていくというのが、いいのではないのかと発表を聞いて思いました。」

篠原氏「とらえる範囲が狭いという指摘ですね。極めて河川工学的な指摘だと思います。」

阿部氏「多分学生さんがあの辺を取り上げているのは、やはり仙台市は珍しく中流域に位置する都市で、その都心部が川に対して非常に特異な状況にあるからではないかと思います。もうひとつは、仙台では地下鉄東西線の工事が始まるという状況で、そこに意識が高まっているわけですね。リアルな議論として、都市部の広瀬川に親水空間が要るって言う人と、そんなのやめてくれよという人が意見を二分するようなことがあります。僕の意見なんですけど、広瀬川がおもしろいのは広瀬川が青葉山の奥の大きな自然体系につながっていて、ひとつの大きなスケールでのエコロジーの連関があり、それが都市の中に突出している先端部に当たるところなんです。小野寺さんが言ったようなセントラルパークを一部はやってもいいと思うのですが、そういうメンタリティが広まったとたんに、川辺ががぁっと埋め尽くされていくような怖さがあって、そこをちゃんとコントロールしながらやれるんだろうかと心配しています。もうひとつ広瀬川の何がすばらしいかというと、そこに入った瞬間に時空を飛べるというか、都市とはまったく違った空間体験ができるところですね。ところが最近では、川から部分的に高層マンションが見える。つまり、広瀬川の中から何が仙台市のほうへ見えるかということがなおざりになっているわけです。僕としてはそういうことの方が広瀬川の整備ということよりも問題じゃないかって思います。だからそういうマンションを建てるメンタリティがあるうちは広瀬川の中に入るべきではないと思います。」

本江氏「仙台に来て6年目になりますが、広瀬川は知ってはいました。『青葉城恋歌』という歌で。しかしテムズにしろセーヌにしろ広島にしてもそうですが、都市には川があって象徴的なシーンを作るのは決まりなんですが、仙台のビジュアルイメージに広瀬川は全然出てこない。街を歩いていてもそうです。最初は地図を見ればここにあるってわかる広瀬川が、実際に仙台にいても体に食い込んでくる感じはあまりなかったですね。ただ時間が経ち、川原に出る空間体験を何度かすると、阿部さんが先程言われたような街との関係性においてユニークだというところがわかるようになりました。そこを仙台の宝だという人の気持ちもわかるようになったんですね。静止画的というか記号的な意味の景観としては、都市と断絶していて山の中の川みたいに見えるわけですが、街で暮らしながら行ったり来たりしていると、広瀬川がとてもかけがえのないものだと思うようになるんですね。つまり関係性のユニークさという視点を入れないと広瀬川はわからないいうことです。今のところ、広瀬川は大事だからそのままにしておきたいなっていう気持ちです。」

五十嵐氏「僕は1年半くらいですかね。全容は詳しくはしらないんですけども、先に学生が挙げていたまとめで言うと、自然というほうが直感的には、ここに関してはいいかなと思います。というのも、都市のすぐ近くに自然の風景が残っていると、川を使うのはいいといったある種の動き、流れの中でどういう風に川を使うかという話がすぐに出てくる。だから、あえてここは使わないほうがいいとか、残しておくというのがあることは結構重要だと思います。次に先ほど本江さんが挙げた、都市とのアクセスがあるかどうかという観点ですが、僕にとっては芋煮がす

ごく衝撃的でした。僕は仙台に来て初めて芋煮という風習があることを知ったのですが、参加してみて、建築や土木的な装置がなくてもこんなに川をうまく使えるのかと驚きました。年に数回のこのような経験があれば川と繋がっている感じがします。そのことを思うと、逆にそのソフトをむしろ全国に広げたほうがいいんじゃないかと思いますね。あと阿部さんが触れていたマンションの話に関していえば、何が見えるかっていうのは結構重要で、風景を作ってしまうのだからそれなりの覚悟があるデザインをしなければならない。それをクリアしているものであれば建ててもいいかなって思います。ただそういう風にはなってないと思う。」

阿部氏「単に景観の話ですけど、例えば広瀬川からみえるそのラインには何もたてないとかそういうレベルの事が達成できたら何かやってもいいと思うんだけど、いまはむしろそういうレベルの事が達成できていない建物が増えてきてます。なんでこんな風になったんだろうと他の先生とも話してたくらいですよ。」

篠原氏「私も昔のことで覚えていることがあって、知り合いに旧制二高の人がいたんだけど、その人が『青葉城恋歌』を歌う歌声とかね顔を見てるといかにも仙台に戻りたいというか、仙台が懐かしいなという感じで歌ってるんですよ。おそらく青春時代を仙台で過ごした人にはですね、心の中にある非常に大事な風景なんだなってのがわかりますね。それは多分みんな一致していると思うし、心の中に残る風景はそれはそれでいいんだけど、それだけでいいのかというのが問題だと思いますね。」

未来の都市と河川の関係を考える
建築と水　阿部仁史

阿部氏「今日は梅田川の話をしようかなと思います。梅田川はもともとは小さな川で、町の中をずっとぬっていくような用水路的な川です。そこが、周辺にたくさんの家が立ってくるに従って当然ながら大量の下水が流されるようになった。そういう経緯から、環境を守るといったことで人々が集まって運動をした事例としてはたぶんかなり初期のものだと思いますが、1960年くらいから梅田川を守るという活動がずっとあったんです。60年代当時は自転車が投げ入れてあるなど結構大きな公害になっていて、上流から下流に至る川周辺の人たちが立ち上がったというわけです。イベントを展開したり、非常に活発な活動が行われ川はきれいになるし、町とか行政区民に切られない川というか違う都市の環境を結んでいくようなことを住民が手を取り合って実現したある種の住民サクセスストーリですね。

ところで今梅田川はどうなっているのかというと、ほとんどフタをされちゃったんです。起きた原因は何かと言うと、下水溝が整備されて梅田川に下水が落ちなくなったんです。で、きれいになったからよかったかと思ったらそうじゃなくて、いままで住民の関心となっていたマイナスの意味での川が基本的には目の前から存在としてなくなったんです。そのとたんに住宅が全部川に背をむけて建って、側溝で全部ふたをしてということで、一次住民活動が盛り上がって歌まで作るような場所だったとはとてもおもえない場所になっているんです。10年前に僕はそこの活動のお手伝いをしたんですが、その時には会長が90歳で全体的にも世代交代が起こってなかった。それで、日本の川というのが生活空間、簡単に言えば建築、住宅とかと本当に関わりがなくなっていったんだなぁと思いました。６０年代はネガティブな意味での関係があったのが、こんどはそれが根こそぎなくなっちゃっていると。つくづく思ったのは、用水路的な川っていうのはやっぱり、都市の中で生きていくためにはいかに住んでいる人間との関わりを作っていけるのかというのが、非常に大事になってきていて、これは単純に見た目がきれいだっていうレベルのことでやっていてはダメだろうということ。そしてまた逆に考えていくと、それがある力をもってやられたときには、川がいわゆる行政のくくりを超えて、人の活動を喚起したりと、活動に関して大きなポテンシャル感じています。川をみていると、高いところから低いところに流れるっていうことは地形をなぞっているわけですね。で、地形をなぞるっていうのは、地域の特色を一番だしていくっていうことになるわけで、そういった川の流域をめぐってもう一度その人間と生活の関係をもう一回作り出すことで地域性とか、そういったものを再活性化する力にもなるんだろうと思っています。」

篠原氏「まぁ人間もそうじゃないかと思うんですけど、やはり見られていないとダメだっていうのかな。無視されるとだめになっていく。つまり人間を育てるためには見てる、常に見てるべきかな。」

都市の裏側の水辺
五十嵐太郎

五十嵐氏「最初に川とは関係のない話なのですが、先々週に塩釜から仙台まで車に乗っけてもらってロードサイドの風景を見てきました。お店があるロードサイドショップの風景が延々と続いている風景なのですが、ここではおそらく電柱を抜き、電線は埋め、みんな三角屋根にしてもよくならない壊れた景観です。それを眺めていました。そんな時、鉄道の高架をくぐって見上げた瞬間に見た、土木的構築物がすがすがしかった。ロードサイド沿いに「うちの店に来てくれ」とひきつけようとしている店が並ぶなかに、そんなことは一切しようとはしない、ある意味で非常に合理的なコンクリートの構築物にある種の魅力を感じた。今、土木デザインの中でも一時代前のものはよくないと言う風潮もあるけれども、一方で時代が変わったからと言ってチャンネルを切り替える場合に全部消してしまっていいのかとも思う。そんなに悪くないのに土木デザインの人が自分の良さを主張しないのか疑問に思う。

それともうひとつ。ソウル、清渓川の復元の話なのですけど、現地を歩いて全工程6キロをいろいろ見てきました。あそこは60年代くらいから暗渠になって、高架がかかって、都市の裏側になってしまったのですね。都市の裏側の空間に高架が屋根になって、その下にお店ができて20世紀後半の歴史の間に、都市の裏側の顔ができた。ただ、あっという間にそれが引っ剥がされて、川が表に出て、そこではもはや過去とはかなり違う。今は過剰にデザインされている。橋にしろランドスケープにしろちょっとやりすぎだって感じる。ある意味では都市軸として再構成されたことがおもいきったプロジェクトでおもしろいという反面、都市の裏側が表になってそのまわりで再開発が始まって両岸にロッテキャッスルとか高層マンションが立ち並ぶ姿を見て、非常に複雑な思いにかられた。単純にいいとも悪いともいえない。いろんな事態が同時に起こって、僕の中では歴史の抽象性を残してもらいたい。一部橋脚も残っているのですが、そういうのがもう少し見たかった。」

篠原氏「ありがとうございます。五十嵐さんの話は、素っ気なさを引け目に感じなくてもいいと言うのと、

評価というのは時代によって変わっていくという話だったと思います。」

水辺の楽校　伊藤登

伊藤氏「今日はさきほどで言えば自然か都市か、ある意味二者択一を学生さんにきつく迫られた気もしますが、ここ渡利地区では、自然が主役の、かつ人が使える空間を実現しました。全体としては２キロぐらいあり、堤防からは草のために水面が見えないところでした。

私には３つの設計条件が突きつけられました。一つ目は河川管理者からの要請で、すぐに堤防の際まで水が上がるから、中小洪水対応の河川断面を確保するために水際の地盤を下げてほしいというもの。二つ目は沿川地域からの要請で、現状では子どもが使いづらいので、普通にみんなが利用できる空間にしてもらえないかというもの。そして三つ目は自然保護団体からで、水際の自然性の回復・復元を何とか図れないものかというものでした。これら３つの条件を突きつけられて考えたことが、あたかも昔からそこにあったような川原を新たに作りましょうということでした。自然の河川が持っている、微地形の特徴であるとか植生の特徴などをうまく使って、デザインできないものかということを考えて実現したものです。

これは最も初期なころの模型ですね。模型で見てもらえればわかりますけども、どの断面をとってみても同じ形はない。領域感なり、開放感なり、そういうのを同時に、かつ移動することによって体験できるような空間をここで実現しようと考えたわけです。中の空間はいくつかの空間に区分されますが、その空間を区切るのは地形の高低であったり、現場で動かした木々によっています。木々を移動するときは、これがまた設計図ではなくて、施工中に現場で対応しており、いわば日本庭園の庭師みたいなことをやっています。堤防の上にいったり、対岸にいったり、橋の上を渡ったりしながら、どんな位置がいいかということを決めていく。歩いていくシークエンスの景観を考慮しながら木の位置を決定しています。

適宜手直しも行っているんですが、少しの改善でも人の動きが変わります。そのように考えると人間って言うのは快適性に非常に敏感な動物なのかなというふうに思ったりもしました。また日本の場合、自然の力、自然の回復力っていうものもすごい。土の中にもともとあった種子が芽吹いてこういう形になるわけです。つまりこの空間というのは、ただ、自然のそういう再生のリズムの中、それと合わせて洪水の力、それをみながら直していく人の力のバランスの中でなりたっているのです。この場所は渡利小学校がすぐ背後にあります。この学校がかなり頻繁にこの水辺空間を使ってくれています。そういうこともあって、子供たちが遊び方をずいぶん覚えたといえますね。今年の夏は、カワリンピックといったか、そのようなものもここで開催していますし、そういう子供たちが遊ぶあるいは学ぶことで地元の町会も頑張るようになりました。」

堀川運河　小野寺康

小野寺氏「堀川運河は、まず近世江戸期に飫肥藩によって開削され、昭和の初期までかけて護岸工事がおこなわれて完成されました。この運河は、飫肥藩の主要産業である「飫肥杉」林業のための輸送経路であって、これによって杉の流通センターをつくろうと考えたわけです。しかし、最初の堀川運河整備事業では、必ずしも護岸の歴史性は重視しないままに、護岸工事が進められていました。歴史護岸の前面にコンクリート方塊を置いて護岸整備しようとしていたんですが、見直しストップがかかり、歴史文化中心の運河整備に方向転換しました。これは大英断だったと思います。

僕らが到着する前に整備されてしまったところは前出しですが、今後は全て昔どおりに、歴史的な石垣が第一線護岸として水域の前面に出てきます。今では、この運河を歴史保全しながら、景観的に整えつつ、ウォーターフロント整備しようってことをしています。デザインのポイントは、運河の石垣や、水面そのものの美しさを生かしてデザインしようというものです。僕らが行く前は、先程五十嵐先生が言っていたような過剰なデザインで埋め尽くされようとしていました。例を挙げれば既製品の防護柵に地元の杉をぺたぺた貼り付けるようなことが行われていたんです。 それに対してこの新しい防護柵や照明柱はどうかというと、よく見ると凝っているんですが、ちょっと引いて見ると風景の方が勝るデザインにうまくまとまった――一緒にデザインした南雲さんとそんな話をしています。つまりデザイナーの存在は消えて、歴史的運河が自然に主役になるということをこれは意図しています。

また、ここに木橋を架けることになりました。昔ここには「方杖橋」という形の橋がありました。現行法規では、この形式の橋は架けられないので新しいデザインでやらざるを得ない。しかしこれを、木の橋、できれば地場の杉、それも集成材じゃなくて生の杉（製材）、さらにそれを伝統工法でやりたい。釘金物はいっさい使わない。ボルトも使いません。それを地元の職人さんの手でやろうってことでスタートしました。いろいろ困難はありましたが、やっと軌道に乗ってきました。

計画過程を追ってみますと、この木橋をケーススタディにして、木材の振興を図ろうという、公共事業に木材を使う筋道を作ろうということを考えながら始めました。そのために行政、地元の林業団体、大工さんなどいろいろな人に集まってもらいました。やってみるといきなり最初から主部材の大きさが問題になり、そもそもこれが地元で安定供給できるかという話になったんですが、そしたら森林組合の人たちが「ためしに一本切ってみるか」といって、お金の手配もそこそこにいきなり伐り出してみることになりました。なかなかオソロシイ土地柄です。結局設計の断面は取れなかったが、若干断面を変えれば行けるということが分かった。現場に合せて設計の方を手直ししたのです。その後も、地元の大工さんが自主的に模型を作ってくれたり（5分の1模型というのが型破りですけど）、東京の空間工学研究所のエンジニアと地元の日南大工が、互いに技術で（コンピュータと実作で）せめぎ合う形で進めてきました。とにかく地元の人がこういう風に頑張ってくれると話は俄然面白くなってきます。だんだん誰が設計者だかわからない感じになっていますけど、それでいいのではないかなって思っています。」

情報技術と川　本江正茂

本江氏「大学で建築コミュニケーションデザインをやっています。車が開発されたのと同じようにＩＴによって我々の行動が変わる。その行動の変化がどんなもので、それによって建築がどう変わるかを研究しています。例えば、携帯が開発されて待ち合わせ場所を決めなくなった。「だいたい８時に街ね。」って言って、「今、どこにいんのー？スタバにいるよ。」って言って会う。これによって街のランドマークとか待ち合わせ場所の意味が変わる。

それで「情報技術と川」なのですが、河川情報システムというのがあります。この辺をにわかに調べてみますと、川って言うのはものすごく

情報システムが実装されている空間だとわかりました。同時にこれを行う公共団体にもずいぶん予算があるのだなと思う。雨量とかあらゆる場所で観測、ダムの観測、リアルタイムで見ることができたり、それで洪水の予想をして市民に伝える。川ってことをめぐっていろいろな投資がされている。こういうものが全都道府県にあると相当な値段です。

しかし、この人たちは何を知らせたくてみんなに見られるようにしているのかよくわからない。これは広瀬川のハザードマップですが、画面、マップのデザインに危機感がありませんし何を言いたいのかなかなかわからない。それでも好意的な目でいろいろ見ていくと、共通して言いたいのは「川ってものは恐ろしいものなのだ」ということがわかます。

なにも脈絡がないようですが、ここで一つ本を紹介します。「河原にできた中世の町」という絵本。知っている方も多いと思いますが、文を日本、中世の歴史の専門家の網野善彦さん、絵を司修さんが書かれている。河原というのはどのようなものだったか。河原というのは人の力の及ばない自然の世界と人の住む世界、その２つの世界の境にある。都市というのはそのような場所にできるのだ。川原には自然のものをとってきて人工物に変える人とか屠殺を行って自然から命をもらう人、商人、罪人、宗教者、芸能の民がいた。そこに都市ができる。横浜とか津とか、都市の地名に川原に関したものが多いのは川原が都市の出自だから。このように川原に都市ができていく話なのですが、川というのは境界にあり不安定である。中世ですからすぐに戦火に巻き込まれる。上から武将が攻め入ってきたり、洪水にも巻き込まれたりする。火事にもあう。火事が起きたらなかなか消えない。変化が多くて、死体が埋められたりするが新しい街をそこに作る場合もある。川原というのは死と再生の場所である。それは現在も同じである。これは、そういう本です。

素っ気のないwebとこの濃密な絵本を両方持ってきているのは川をどう文化の中でどう表象していくかということの了解を考える必要があると思ったからです。僕らは川からいったん遠のいているので、川に恐れをもって新しく表現しなおすことがうまくできていないでいる。川をどう使うかって話でもありますし、川辺のデザインというか川を僕らの文化の中でどう表現するかという話です。重要な課題であるにも関わらず、なんか遠のいていくこであえてドライに収められている。世代は、生々しいものを切って捨てがちだと思われやすいですがそんなものでもない。もっとエモーショナルで現代的な川の表現を見せられると思う。川の具体例を見せられればいいのですが、見せるものがない。司さんの絵のようでありたい。」

川を総じて･･･

篠原氏「私もまぁ、一言ぐらい言いたい。今回は川について議論してきたわけですけど、川は地域によって特徴が違う。よく習うこととしては、とかく、日本の川は急流であると。アメリカの西海岸のゆるい勾配で何千キロもある川と比べると、日本の川がこんなにも急で洪水対策も大変だということがわかる。いつもはちょろちょろしか水が流れてない川でも、洪水になるとアメリカの川はせいぜい十倍か二十倍くらいなんだけど、日本の川は何百倍、場合によっては千倍以上になる。洪水と普段とは全く様相がちがって大変だということですね。

でも、実は教えてないこともあってですね、私の尊敬する人のひとりなんだけど、新潟大学の大熊さんに言われて思ったことがあって、日本の川は急流だけど、短いんだよね。つまり日本の川は海と森とが極めて密接な関係にあるということです。川の上流の森林に人家があって、そこにはサザエとかあわびとかが奉ってあるんですよ。つまり漁民は上にちゃんと森林があって、それで海が生きているんだと。それを仲介するのが川だということもわかっていたということです。

川というものは極めて海にとっても山にとっても重要だという話なんですけど、そういう特性がある川だから、ただの洪水対策だけじゃなくて、川が人間の生活とどう結びついているのかということも、官公民で議論したりしないといけないのではないかと思います。」

本江氏「実際に川を物理的にデザインしておられる方もいますし、本当は会場にいる提案してくれたみなさんにも聞きたいところですけど、川はそんなに安定したものじゃないし、不安定なんだという姿をどう意識して織り込んでらっしゃるのかを聞きたいと思います。高さがこれくらいあれば外に溢れるのは年に一度といった表現とは違ったものですけどいかがでしょう。」

伊藤氏「先程、本江先生の話で水位の断面がでましたけど、実はこれは携帯でも見られまして、僕は結構見るんですよ。何で見るかっていうと、渡利地区の水辺の学校では川岸に柳があって、この画面に水位が１．９５ってでてくると根に水が当たったなと思うんですよ。３．５になるとちょっとまずいなって思うんですよ。そういう意味では重宝しています。あそこは構造物がないので、柳が流失してしまうと、さびしいものがあるのでね。自分の子供のようなものなので、心配してよく見ています。

川は普通のときは優しい表情していますけど、時として怖い顔をします。でもそんな時でも、それぞれの水位で水際線が映える、表情が変わるところを理解してもらえるような空間にできればと考えています。」

小野寺氏「先程阿部さんのほうから梅田川の話がありましたけど、僕は千葉県浦安市にひとつ猫実川っていうのをやりました。コンクリート三面張りの川があって、周辺で下水が整備された結果、川への放流は減った代わりに、水量も減って逆に水質悪化が進んで臭くなったと住民から苦情がありました。梅田川と極めて状況が似ていると思います。それでどうしたかっていうと、二層河川といって、上下に川を作ったんです。下の地下河川は洪水のときにだけどっと水を流し、普段は地上部にせせらぎを流す。上は親水施設として、江戸川の本流から比較的きれいな水を持ってきて流して、普段はきれいなふりをしているっていうそういう川なんです。ただ僕はそれをやって失敗したことがあって、新しく風景創りましょうってときに、せせらぎに柵をつけたくなかった。阿部さんがさっき指摘したように親水公園になると柵だらけになっちゃうっていう懸念があって･･･。結果的にどうなったかっていうと、歩道とせせらぎとの段差を低くし続けた結果、流速がすごくおだやかな、なだらかなせせらぎになったんですよ。でも実はこれが、汚れがつきやすくてですね、管理が大変だっていうことでした。また周りに木があったんですけど、防水が悪くて水がしみこんでいって根が腐るということもあって見事な惨敗でした。

ここで実感したのは、川というものは本当に「生もの」だということです。僕は思うんですけど、最初の広瀬川にしても手を加えるのは僕はいいと思います。都市と水辺をつなぐという意味で。ただ川は生モノなので、五十嵐さんもいわれたように，過剰なデザインでこのようなことをやると目も当てられないので、その辺はバランスが大事ではないか。今回のコンペでもそのあたりはポイントの一つで、評価にも影響したんじゃないかなって思います。」

篠原氏「この前、猫実川に今の大学の生徒を連れて行ってきたんですが、ひどいことになってました。小野寺さんが言ったような話じゃなくてもっとひどくなっていて、駐輪場になっていました。多分水の上だけ駐輪していないのかな。そのとき学生がうまいこといったんだけど「なんでこれもっと駐輪できるようにうまくつくらなかったんだろうな」「なんでこんなところに水流してるんだろう」って。

それはともかくですね、僕は土木で建築の人とか、造園の人とか、IDの人とかと一緒にやることが多いんですが、つくづく建築の教育はうまくいってるなと思うんですよ。これはお世辞じゃなくて。なぜかというと、建築学科の中には造園的な講義もあって、街灯とかちょっとした公園もやれるし、それにもちろん照明もやるのでID的なこともできるし。ただ唯一の欠点は水のことをぜんぜん知らない。教わったことがない。本江先生の領域か阿部先生の領域になるのかはわからないけど、大学の若いときに半コマくらいでもいいから河川ってこういうのですよってのをね、若いときに一番初歩的なことをですね、やっとくといいんじゃないんでしょうか。」

伊藤氏「今日は大きいテーマが都市か，自然かというところから始まっていますけど、阿部先生のお話にしろ、五十嵐先生のお話にしろ、学生さんが川とのかかわり，これは人と川との関わりと置き換えたほうがいいのかもしないですけど、そういうことを考えるいい話題だったなと私自身思っています。自分自身は東京の下町のほう、すぐ家の近くに隅田川のかみそり堤防があるというというところに住んでおります。折に触れてという言い方はおかしいかもしれないですけど、沿川でマンションなりの建築行為が発生した折にというか、なるべくかみそり堤防をやめて、河川空間を開放するような方向には一応向いてるんですよね。

ただそういうところというのは、点的にはあるんだけれども、これがだんだん線状になってきてます。面白いなって私自身思ってるのは、線状になった途端に決定的に人の動きが変わるって事ですね。必ず水辺を求めて人の動きがそちらに向かっていくということなんです。都市と川の接点は非常に重要だということになりますけど、それを物理的に謝絶していたかみそり堤防というものですけども、ちょっと変わるだけで、一気に人は川に向いていくんだなと実感しております。こういうところを阿部先生や五十嵐先生はどう思っているのでしょうか。」

五十嵐氏「今言われたこととは違うと思いますが、いろんな事例を見せてもらって、ちょうど人と水の境界に発生してくる柵っていうのは難しいなと思いました。僕が水のことを少し考えるきっかけとなったのは東京キャナルプロジェクトという連続シンポジウムに３年ほど前に関わったときに、いろいろなケースタディをとりあげながら考える機会があったからです。海へのウォーターフロントから内陸に戻り、川の水との接点という方向に視点がむいたプロジェクトだったんだと思うんですが、特にオランダの運河が張り巡らされた都市になんで柵がないんだという話がとても印象的でした。柵がない理由のひとつは、着衣水泳がプログラムになってること。つまり絶対落ちないんじゃなくて、落ちることもあるというのが前提でみんなが川と向き合っているということです。これを聞いて、現在のセキュリティーが過剰になっていく日本の中でそれをやるのは難しいと思いながらも、一方で人と水の関係にまったく違う可能性を想定して、そこから考える想像力の余地は持っていてもいいかなと思いました。」

阿部氏「グランドキャニオンもここから落ちたら即死というところに手すりが無かったりするんですよ。そうすると、安全というものをどう担保していくかっていうやり方には手すりをつけることもあれば、今五十嵐先生が言ったみたいな泳ぎを鍛えるというところもあって、なんかもう少し幅の広い担保の取り方があるのではと思っています。ちょうど今日来る前に、フランスの洪水の対処の仕方というのを読んでいてですね、さきほど篠原先生が言われたように、フランスはきっと急流じゃないからってことなんでしょうけど、流域の人たちに責任があるし、基本的に住んではいけない地域に住んでる場合はその人が悪いってことになる。究極的にいえば、ただ保険制度でカバーしていくのがやり方で、護岸というのはほとんど限られたところでしかやられていないということです。

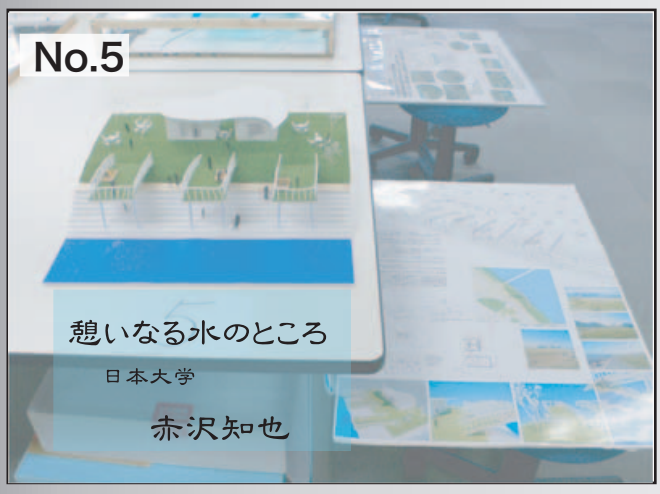
そうすると日本の社会の中で、結局景観という要素と安全という要素が常に相反する形で出てきたり、あるいは安全というものを担保しなきゃ行けないが故に、やらなければいけない事が大量にでてきて、すべてが誰にも責任がいかないようなそういう態度が作られていてるということになります。私たちの環境がそういうものに全部囲まれるようなことになってしまったら、本当の水が持っているような生活に与える軽やかさみたいのが決定的無くなってしまうんだろうなと思っていています。そういうことに関して、土木とか水に携わっている人たちはどんな風に考えて、どんな風に戦っていこうとしているのかということに今後すごく興味があります。」

篠原氏「まとめ方は難しいんだけど、水辺とか都市の河川といった場合には、学生諸君がまとめてくれた通りで広瀬川は都心部に近い極めて特殊な川です。だから他の言い方をすると、他はあまり参考にならなくて仙台の人が考えてくれなきゃどうしようもない、そう思います。それがまとめですね。

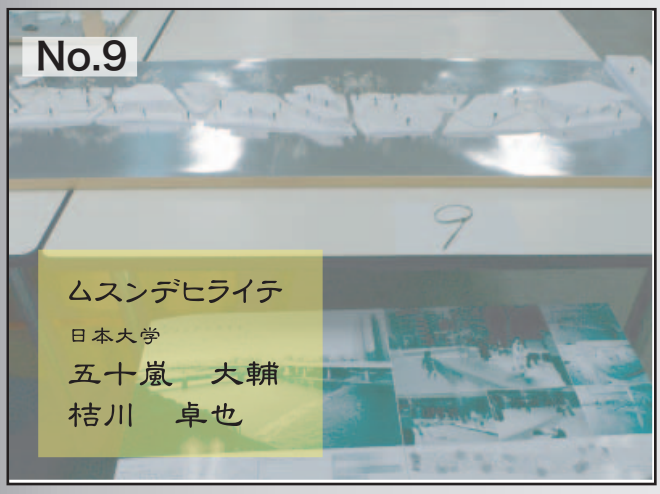
あともうひとつだけ言うとですね、僕は都市というのは散歩ができる、散歩がしたくなるところが都市だと思っています。そういう意味で言うと、仙台は合格ですね、多分。青葉通を歩いたり、定禅寺通りを歩いたり･･･。だけど、水を使ってどう散歩できるのかなっていうのがでてくると、水辺を歩くのか上から見て楽しむのかよくわかりませんけど、それがでてくるともっとよくなるのではないかと思います。それが仙台に対する期待です。

最後に、ばらばらなような気もするし、いや意外に重要な指摘があったような気がしますし、これがこれからの広瀬川に限らないですけど仙台の水・川を考える何らかの参考になればと思います。今日発表してくれた学生さんも持ち帰って、またこういう話が生かせるようになると思います。どうも長時間ご清聴ありがとうございました。」

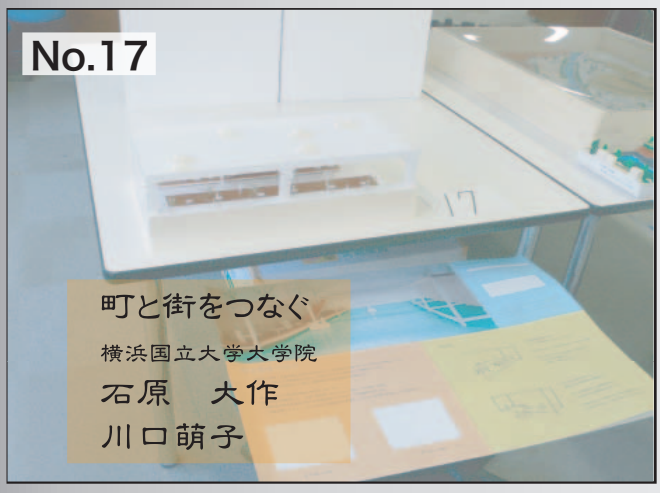
応募作品紹介


No.5
憩いなる水のところ
日本大学
赤沢知也

No.7
川と人とのコラボレーション
国際コンピュータビジネス専門学校
堀内　強　　澤田　剛
都筑　岳　　濁川　太郎
宇野女　拓也

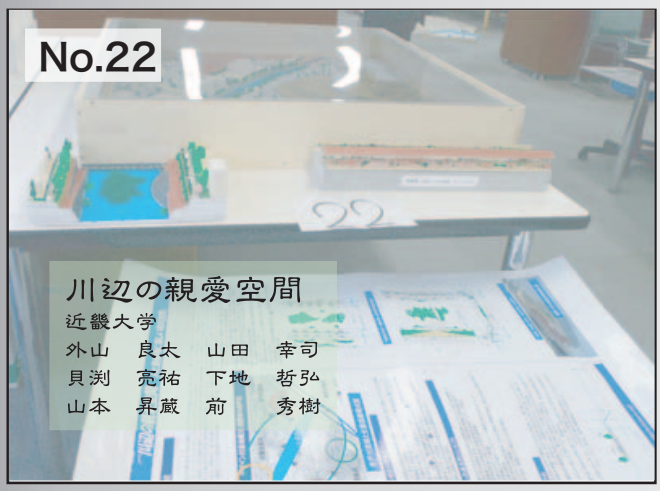

No.9
ムスンデヒライテ
日本大学
五十嵐　大輔
桔川　卓也

No.11
End　Plan
高知工科大学
上岡　健二

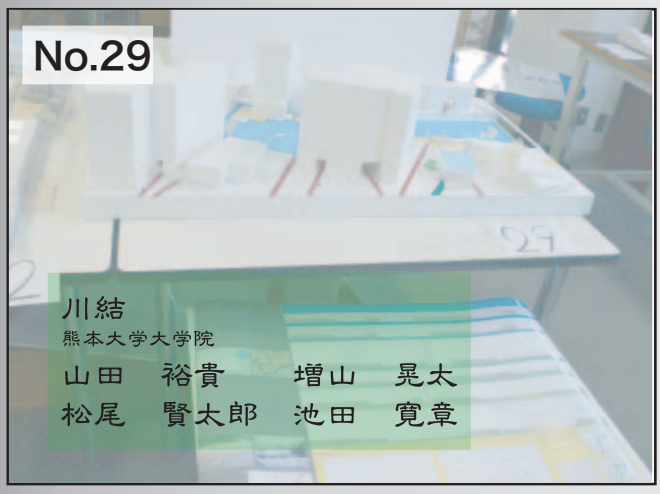

No.17
町と街をつなぐ
横浜国立大学大学院
石原　大作
川口萌子

No.21
HEART
早稲田大学
添田　信行　　高野　裕作
豊田　真彦　　沖野　俊介

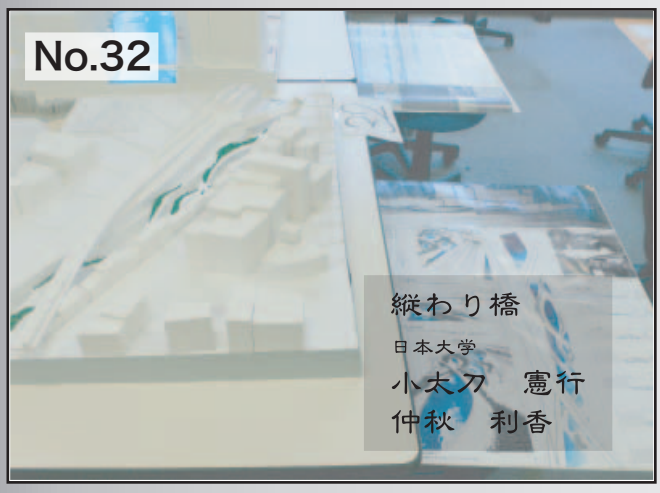
応募作品紹介

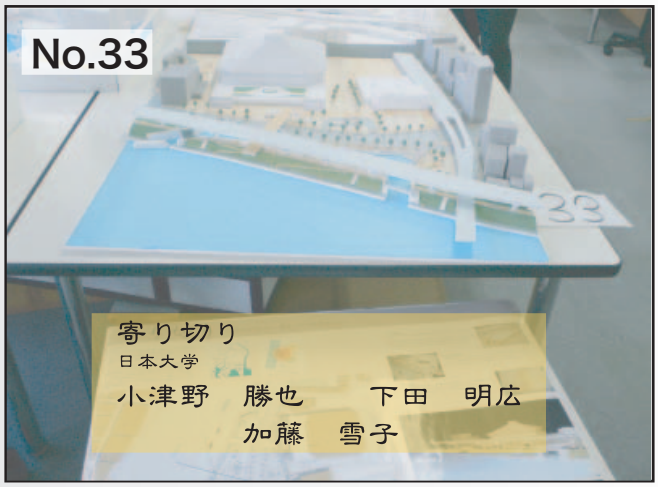

No.22
川辺の親愛空間
近畿大学
外山　良太　山田　幸司
貝渕　亮祐　下地　哲弘
山本　昇蔵　前　秀樹

No.26
翠の光街道
大阪工業大学大学院
布川　茂樹


No.29
川結
熊本大学大学院
山田　裕貴　増山　晃太
松尾　賢太郎　池田　寛章

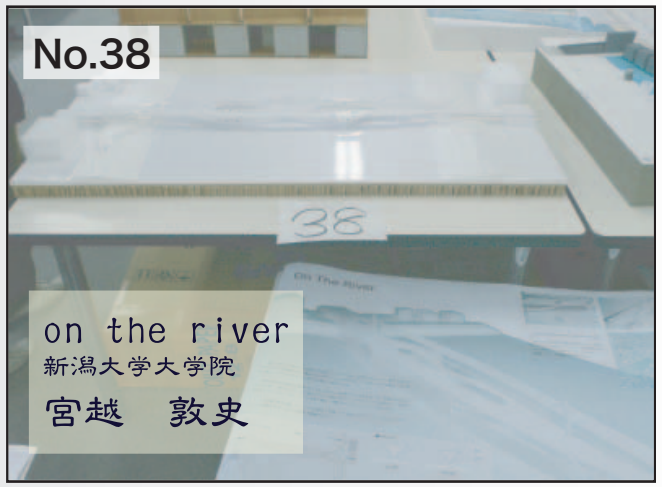
No.31
WATERLAND
本間利雄設計事務所
井上　貴詞


No.32
縦わり橋
日本大学
小太刀　憲行
仲秋　利香


No.33
寄り切り
日本大学
小津野　勝也　下田　明広
加藤　雪子

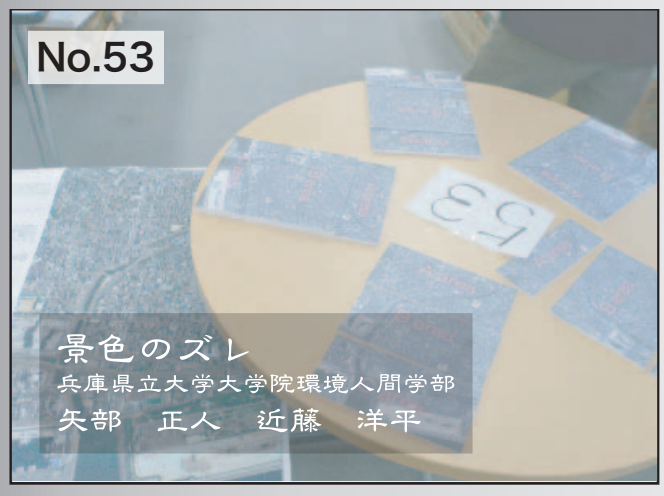
応募作品紹介

No.34
京都模様
立命館大学
水谷　好美


No.38
on the river
新潟大学大学院
宮越　敦史

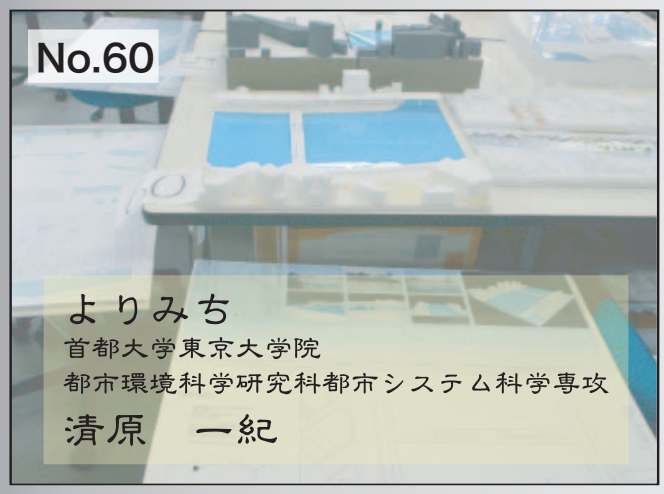
No.45
川に浮かぶみち
東京大学
大杉　哲也

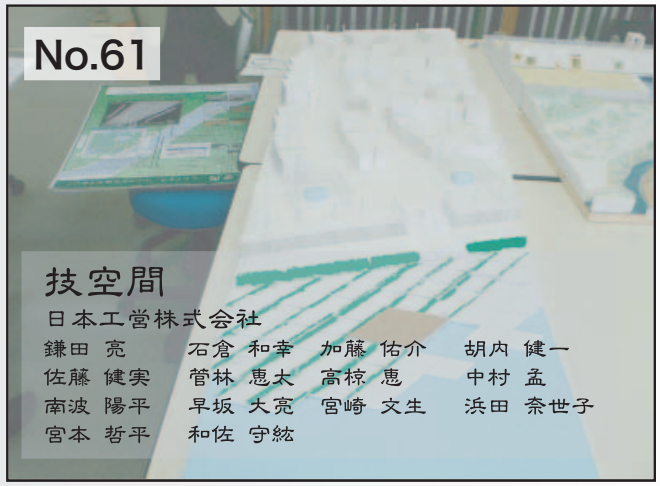
No.51
川もよう
千葉大学
大野　暁彦


No.53
景色のズレ
兵庫県立大学大学院環境人間学部
矢部　正人　近藤　洋平

No.56
Riverside Ship
京都工芸繊維大学大学院
京　智健　谷口　真依子

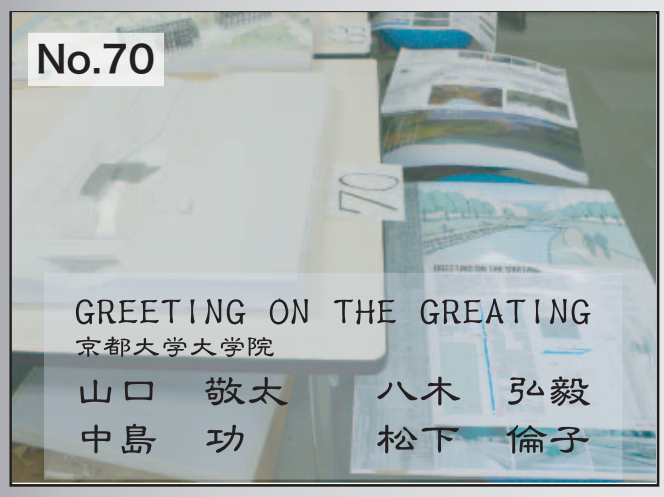
応募作品紹介


No.60
よりみち
首都大学東京大学院
都市環境科学研究科都市システム科学専攻
清原　一紀


No.61
技空間
日本工営株式会社
鎌田 亮　石倉 和幸　加藤 佑介　胡内 健一
佐藤 健実　菅林 恵太　高椋 恵　中村 孟
南波 陽平　早坂 大亮　宮崎 文生　浜田 奈世子
宮本 哲平　和佐 守紘

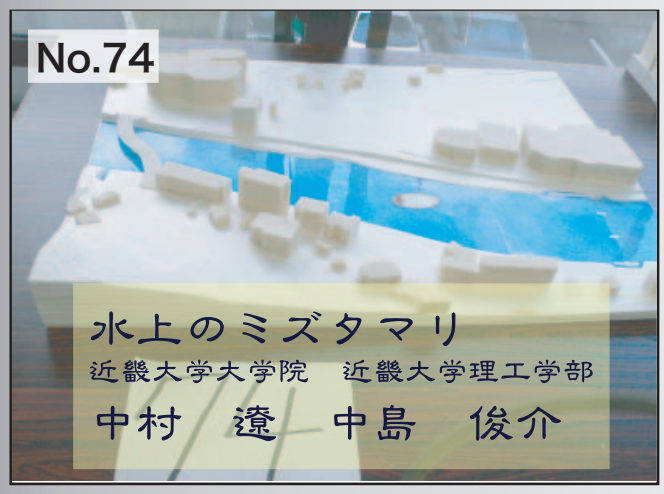
No.62
Trigger
日本大学生産工学部建築工学科
阿出川　南　里見　慎拓
高橋　知巳　中村　恭平

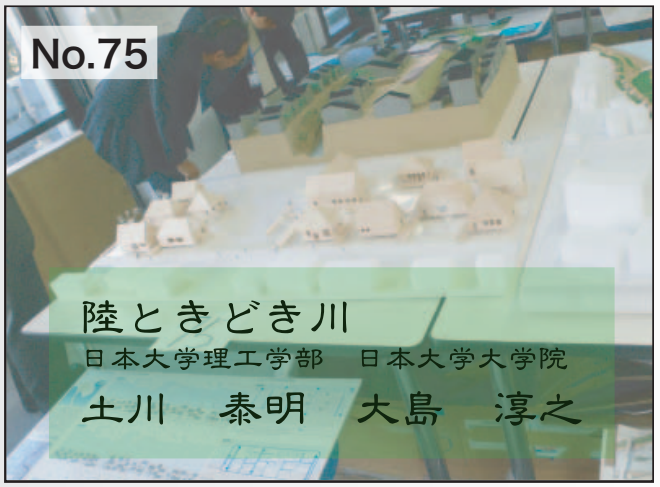
No.63
SCENE　CITY
日本大学生産工学部建築工学科
柏倉　健司　河本　永樹
松本　努

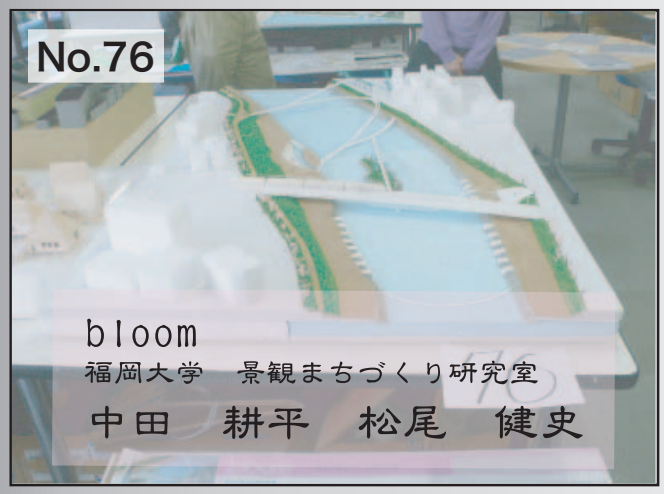

No.70
GREETING ON THE GREATING
京都大学大学院
山口　敬太　八木　弘毅
中島　功　松下　倫子

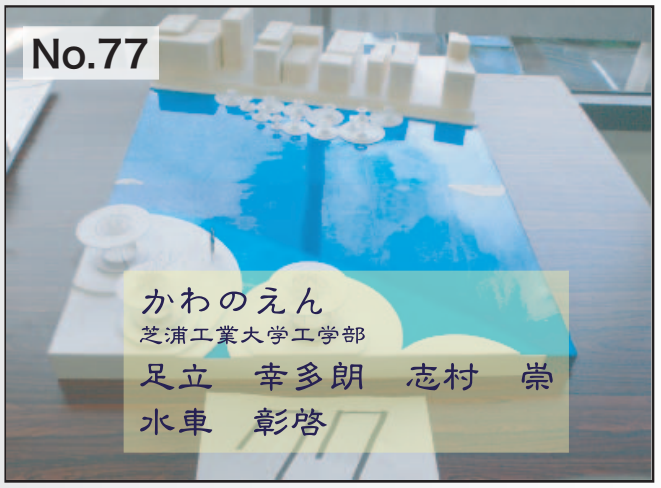
No.72
ODOI-ONSEN　Project
京都工芸繊維大学大学院
森岡　俊介

応募作品紹介

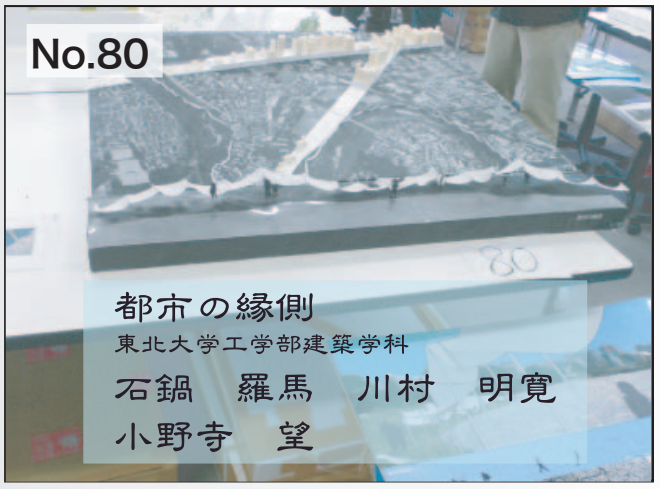

No.74
水上のミズタマリ
近畿大学大学院　近畿大学理工学部
中村　遼　中島　俊介


No.75
陸ときどき川
日本大学理工学部　日本大学大学院
土川　泰明　大島　淳之


No.76
bloom
福岡大学　景観まちづくり研究室
中田　耕平　松尾　健史


No.77
かわのえん
芝浦工業大学工学部
足立　幸多朗　志村　崇
水車　彰啓

No.79
脱浸水区域
早稲田大学院
西田　佳祐　坂井　遼
白井　健太郎　伊藤　豪基

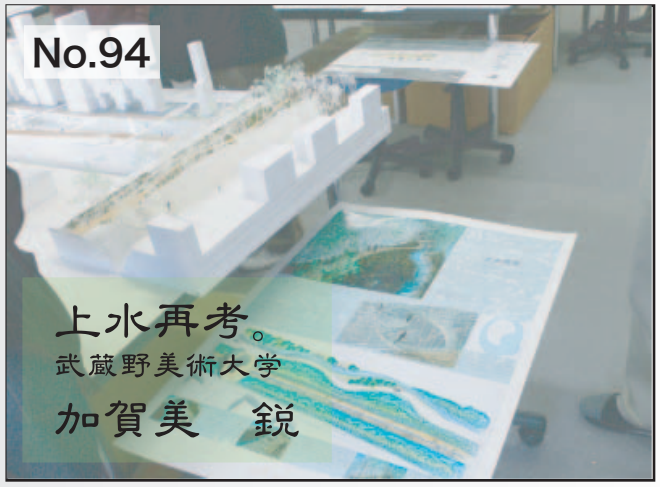

No.80
都市の縁側
東北大学工学部建築学科
石鍋　羅馬　川村　明寛
小野寺　望

応募作品紹介

No.81
灯籠流し
東北大学
鈴木　茜　小池　宏明
長坂　光

No.84
川の上から
関西大学大学院
向　尚美

No.90
水糸都市
日本大学生産工学部
石田　憲　八木　一憲
佐藤　祐介　八島　健介
金子　吉彦


No.94
上水再考。
武蔵野美術大学
加賀美　鋭

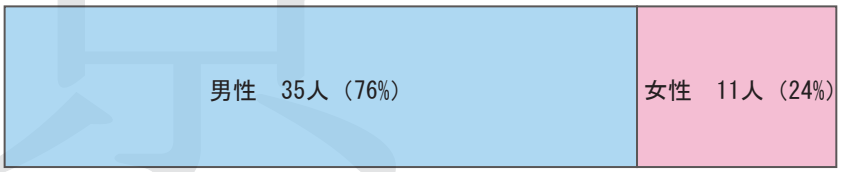
No.95
波紋
名古屋工業大学大学院
村木　正幸　大柳　聡

No.96
cross the three layer
首都大学東京大学院
数藤　良太郎

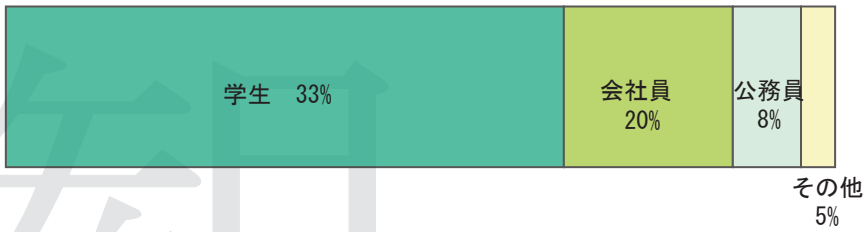
来場者アンケート集計

■来場者について

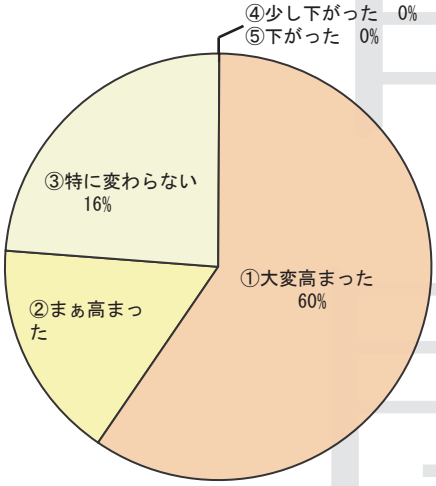
来場者内訳
- 来場者総数　47名
- 男性　35名
- 女性　11名
- 無記入　1名



- 学生　33名
- 会社員　10名
- 公務員　4名
- その他　92名
- （自営・無記入等）

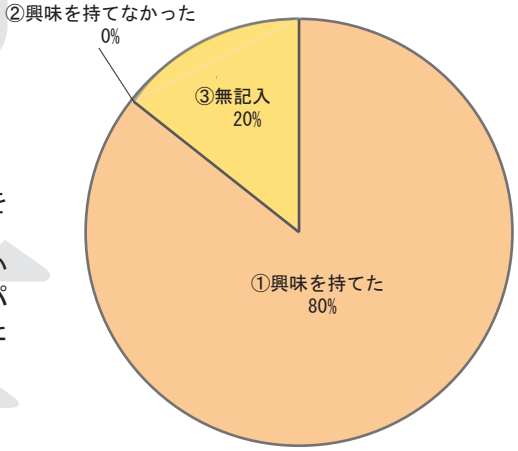


■この展示を見て土木デザインへの関心は高まりましたか？



8割以上の方が来場前よりも土木デザインに対する関心が高まったと感じています。

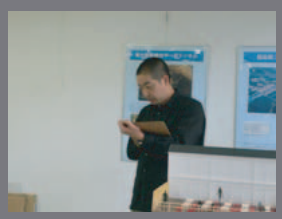
■パネルディスカッションに興味を持てましたか？

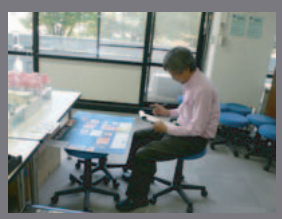


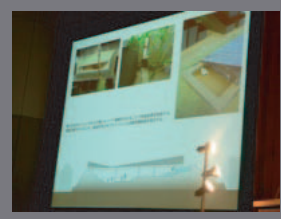
お答えいただいた方全員にパネルディスカッションに興味を持っていただけました。
内容については、異なった視点が面白い、建築と土木両面からの意見が聞けた、などの意見をいただきました。ただ、パネラー同士でのやりとりが希薄だった、話の論点が広かったので絞ってほしかった、との意見もありました。

この他、運営などに関して様々なご意見・ご感想をいただきありがとうございました。

メイキングPHOTO







開催を終えて

■「景観開花。」のこれまで。そして、これから

「大学でデザイン教育を受けていないが、デザインをやりたい土木の学生へのエール。」そして「土木の若い人たちにデザインの場を。」と言うつもりで始めた「景観開花。」も既に３回を終えた。当初は、デザイン教育が行われていない土木の学生からの応募もあり、非常に嬉しく感じたものである。しかし、回を重ねると、土木でデザイン教育を受けたもしくは受けている方、そして建築の方からの応募が中心となってきた。それとともにデザイン水準は確実にあがってきていることも実感している。これはコンペとしては極めて喜ばしいことであるが、その反面、受賞作品のクオリティを見て、デザイン教育を受けていない土木の学生諸氏からは、敷居が高いものになってしまったのではないかと、懸念している。しかし、ものは考えようである。たとえ、土木でデザイン教育が行われていなくとも、土木がある大学には、多くの場合、建築もある。だから、そちらに飛び込んでさえくれれば、デザイン教育は受けられるはずである。実際、当方の学生にも、建築設計製図を受けるよう勧めることが多い。教育は受けるものではなく、自ら選ぶものだと学生諸氏には、改めて申し上げておきたい。そうやって、一人土木で建築に混じりながらデザインを学んだ学生が、４回以降のコンペに応募してくれたら、この上なき幸せである。なぜなら、そのための「景観開花。」なのだから。決して、大学にデザインの先生が居て、デザイン教育を行っているところの学生だけでは、景観は開花することはない。それだけ、土木業界は広く大きい。そして、ことデザインにおいては、もはや、土木だの建築だの言っている時代は終わった。良いデザインを前にすれば、それが土木出身の人がやったのか、建築出身の人がやったのか、造園出身の人がやったのかなど全く意味をなさない。デザインとはそう言うものである。

当初はコンペの成功のために、建築系の学生も応募しやすいテーマからスタートし、昨年は、水辺という、土木よりのテーマとした。それでも、多くの方が応募してくれたことに後押しされ、今後は、より土木色の強いテーマを掲げて、「土木の若い人たちにデザインの場を。」提供していきたいと考えている。もちろん、ここで言う土木とは、土木を対象とするデザインであり、出自を問わず、土木構造物をデザインしたいと志す人全てのことである。

最後に、コンペというイベントは、実は支出項目しかないイベントである。賞金、旅費等々。このコンペを支えているのは、今後の土木デザインの展開を期待してくださる、建設協会、そして協賛企業各社の賜である。改めて感謝したい。そして何よりも、本当は作品を応募したいだろうにそれを我慢して、ほとんどボランティアの状態で、運営に協力してくれる若者達が居るからこそなり立っている。改めて、感謝したい。

景観開花実行委員会
実行委員長　平野　勝也

■開催を終えて

土木デザインというものに興味を持ち、些細なきっかけから前年度の景観開花実行委員会に参加し、２年間運営に携わってきました。例年事務局は東北大学平野研究室の学生を中心に、有志在る学生が集まり運営をしていくという形になっています。本年度は研究室の学生は少なく、正直本企画を行うには厳しい状況でした。しかし、多くの有志ある学生が手伝いに名乗りを上げてくれ例年になく良い体制で運営に臨めたのではないかと思っております。

事務局では主旨やテーマなど設計競技・パネルディスカッションを行うために必要なことから、どのようにしたら一般市民の方に広く知らしめることが出来るかなども考えていかなければならず、企画から開催まで多くの時間を費やしてきました。
まだまだ改善すべき点を残していると思いますが、開催を終えた今では人々が土木デザインについて考えるきっかけを与えることが出来たと思っております。

景観開花実行委員会
事務局長　橋詰　知尚

編集後記 ～景観開花を終えて～

■運営について

本年度の景観開花。は日程が昨年度より早まったために応募期間も短く、応募者が集まるかどうか心配な面もありましたが、昨年度より多い数の作品の提出がありほっとしました。
運営メンバー一同も、一次審査、二次審査と準備を進めるにつれて皆このコンペの意義を考えるようになり、スムーズに進めることができたと思います。
最終審査会の宣伝がもう少しできれば良かったな、など反省は沢山ありますが、まず協力を頂いた全ての実行委員会のみなさんに感謝をし、来年度以降の更なる飛躍を目指して今回の経験を生かしていきたいと考えています。

■土木と建築

土木も建築も景観を構成する要素であるという点で同じである。例えば川からの景色を考えたとき、堤防や橋などの土木構造物と近隣の住宅や施設などの建築物とが一体となって景観を形成している。しかし、建築家が個の力を発揮していても、それが周囲の景観に馴染んでいないことはよくあるし、また、無味乾燥な土木構造物が立ち並んでいても、場所の面白みにかける。２つの分野が一つになることで将来よい景観が作り出されることを、私達は意識していかなければならないのではないだろうか？

■都市、川、仙台

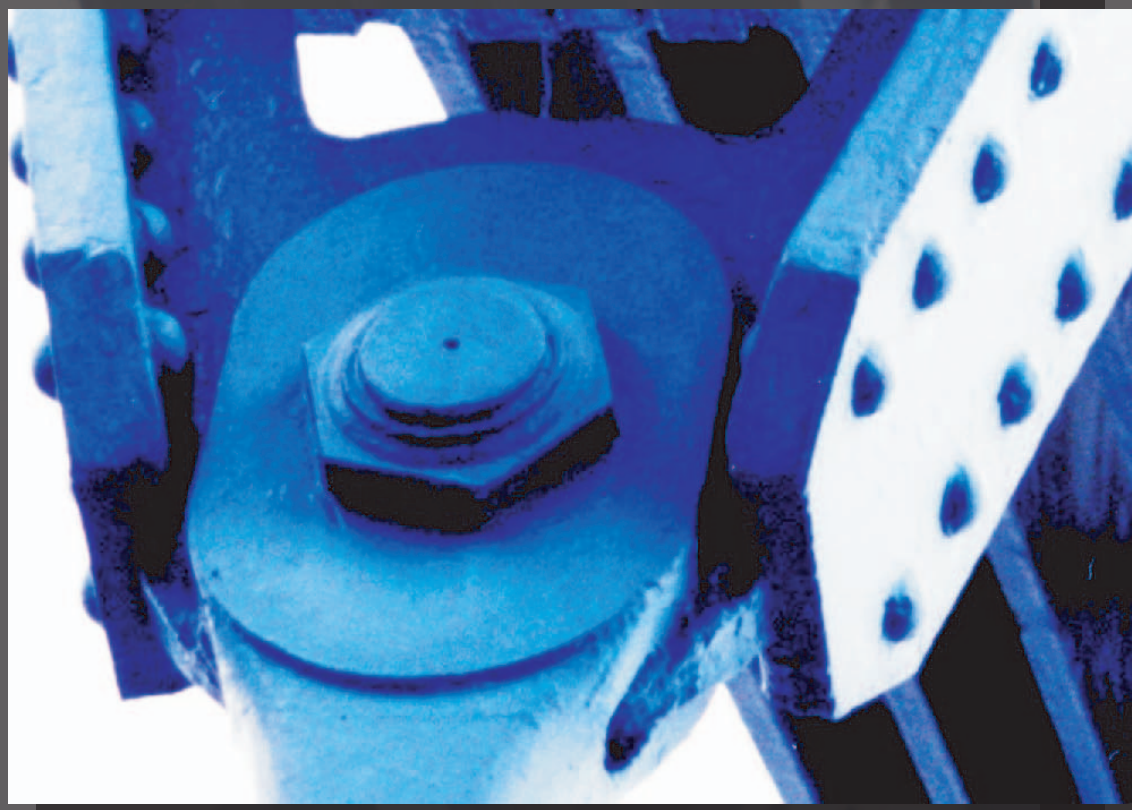
都市と川との在り方を考えながら、仙台、広瀬川を見てみると、親水空間は少なく、普段は疎遠となるかもしれない。しかし芋煮シーズンとなれば多くの人が川に向かい、東西線の計画が持ち上がれば、広瀬川について抗議、質問が殺到する。広瀬川は仙台市民に愛されている。大事なのは人と川との関係を築くことであり、深めることだ。その意味で広瀬川は大成功していると思う。

■景観開花の未来

前年度は事務局の仕事、やるべきことをこなす事で精一杯だったように思います。しかし、本年度は事務局の人数も増え、自分たちがどのように景観開花。を表現していくかにチャレンジしてきました。様々な制約がある中で葛藤し、自分たちの力のなさを感じる事や、事務局の中で個性がぶつかり合う場面多々ありました。しかしながら、応募者や市民の皆さん、そして自分たちが納得いくプロジェクトとするために、一人一人が考え行動し、運営を通じて成長できたと思います。
今後もこの経験とチームワークを生かし、是非市民の皆さんの予想を超える、景観開花。を創りあげていきたいと思います。

景観開花。学生スタッフ
篠田健　三浦陽子　榎原彩野　北島陽介　國枝真季　那須綱太郎　堀内智司
石黒雅彦　菅澤晶子　高田直樹　橋詰知尚　八木亮輔　和田健太郎
石原真梨子　齊藤愛里

景観開花



■主　　催　景観開花。実行委員会
■実行委員会　東北大学工学部建築・社会環境工学科
平野研究室
(社)土木学会景観・デザイン委員会
(社)土木学会東北支部
(社)東北建設協会
■協　　賛　(株)東京建設コンサルタント
ヨシモトポール(株)
(株)アイ・エヌ・エー
(株)大本組
大日本コンサルタント(株)
(株)長大
(株)復建技術コンサルタント
(株)プランニングネットワーク
八千代エンジニヤリング(株)

■後　　援　国土交通省東北地方整備局
青森県　秋田県　岩手県　山形県　宮城県　福島県
仙台市
(社)日本土木工業協会東北支部
(社)建設コンサルタンツ協会東北支部
朝日新聞仙台総局
読売新聞東北総局
毎日新聞仙台支局

河北新報社　NHK 仙台放送局　ミヤギテレビ
TBC東北放送　KHB東日本放送　Date fm
仙台放送

問い合わせ
東北大学工学部 建築・社会環境工学科 平野研究室
〒980-8579 仙台市青葉区荒巻字青葉6-6-06　「景観開花。」実行委員会
Tel:022-795-7496 Fax:022-795-7494
Mail:design@plan.civil.tohoku.ac.jp
URL　http://www.plan.civil.tohoku.ac.jp/~design/

景観開花